



カントウータ

Cantuta

No. 52



G7広島サミットのメディアセンターのアルジー株式会社のスタンドアップポジション撮影
写真提供：アルジー株式会社代表取締役 宮城 信彦氏

1. **ボリビアと日本を繋ぐ企業・団体情報** :
映像のマルチカンパニー：アルジー株式会社……………宮城 信彦
2. 初のアフリカ大陸・タンザニア滞在記 (その1)
……………上崎 雅也
3. ボリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を
生き抜いた人々— その4 ……………渡邊 英樹

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

ボリビアと日本をつなぐ企業・団体情報

**1. 映像のマルチカンパニー：
株式会社アルジー**

株式会社アルジー 代表取締役
一般社団法人日本ボリビア協会 理事
宮城 信彦

1. アルジーの業務内容

当社は、映像の入り口である撮影から始まり、編集、音処理、それを電波に乗せて放送として衛星に送るアップリンク（uplink）、中継車を使って現場から内外の放送局などへ伝送する中継まで、放送に関わる映像技術全般を網羅する業務を行っています。編集室、MA室（音声編集）送出センター（Playout）、テレポート（衛星伝送地球局）、SNG（衛星伝送車）、OBバン（制作中継車）、撮影・収録、大型LEDスクリーンなど映像の入り口から出口までの業務を行うインフラを整備しています。

特に、当社の特徴として映像伝送用の大型中継車を数多く保有している点にあります。日本では映像用の中継車を持つ会社は大きく2つに分かれ、放送局系列とそうでないアルジーのような会社に分けられます。（中継車はこの他携帯電話用・災害対策用もありますが特殊用途のため割愛します。）

放送局系列が持っている中継車の電波免許は、放送に用途を限定した電波免許が付与されているため、それ以外のサービスには使用できません。他方、アルジーに付与されている免許は用途限定が無いいため放送にもその他サービス用の伝送

にも使用できるため、オリンピックなどの国際映像中継にも使用可能です。そのため海外の放送局が日本から自国に映像を送る際にアルジーの中継車やテレポートを利用します。海外の衛星を受信して海外から日本に伝送される映像をテレポートで受信して中継し、国内の拠点まで伝送する業務も行なっています。

これはラグビーワールドカップの時も同じで、アルジーは当時所有していた衛星中継車4台をフルに駆使して世界中に電波を届けておりました。



写真1-1 アルジーグローバルテレポートセンタ

アルジーには世界からオリンピックなどスポーツイベントに参加する各国の放送局が独自に日本で取材した映像を本国に送るといった仕事があります。そのような仕事は海外通信社または放送局から当社が直接受注して中継を行います。

日本から海外に映像を送るためには会場などから韓国や中国などの日本近隣の国に対しては直接伝送できるのですが、それ以上遠い国に送るにはアルジーが所有する長距離伝送用の中継設備を使用する必要があります。現在では、日本では

放送局以外ではアルジーが最大級の衛星中継車保有会社（映像系）となっております。

また、派生事業として海外の衛星放送をホテル客室やパブリックスペースで見ることができるようにする事業や、海外から日本に来る撮影クルーのために諸々のアテンド業務を行い、撮影機材の手配から撮影地選定、移動、宿泊などのロジスティックスから通訳、翻訳などの手配業務など、サービスを拡充しています。

2. アルジーの実績

日本で行われるスポーツゲーム、F1などのモータースポーツレース、音楽コンサート、舞台演劇、など様々な文化イベントについては撮影部分と中継部分を担います。2020東京オリンピック（開催はコロナ禍で延期になり、2021年開催）の公式国際映像の衛星中継を担当し、オリンピック・パラリンピックの国際映像伝送も担当しました。



写真1-2 東京オリンピック競泳会場での中継

国によっては自国の選手だけの様子を中継するために中継車を別途手配して伝

送するようなことも行われており、その他にも東京の街を紹介するビデオを撮影して伝送する仕事も受注しました。



写真1-3 東京オリンピック閉会式の中継

2023年に行われましたワールドベースボールクラシック（WBC）ではAmazonの配信用の伝送を担当し、香港まで送信してから全世界に配信されました。

その他、ゴルフ、サッカー、バレーボール等の日本で行われる国際大会では公式国際映像伝送担当として使われています。

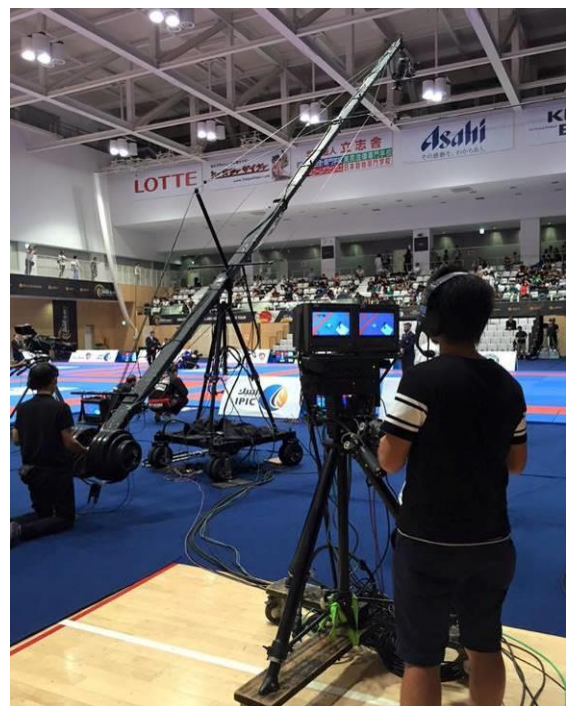


写真1-4 スポーツ国際大会の撮影

スポーツや演劇、コンサートなどの文化部門だけではありません。G7やG20サミット、海外要人来日の際の生中継や取材映像伝送などの政治イベントも業務範囲です。今回の広島サミットでも当社の撮影から伝送までの一貫した業務を多くの国の放送局にお使いいただきました。



写真1-5 G7広島サミットでも撮影から伝送まで多くの国の放送局で使っていただきました。

3. 南米における当社のビジネス

日本とボリビアとの間の衛星放送中継の将来性や、ボリビアの放送事情について少しご説明致します。

世界のテレビ方式には大きく分けて2つの方式があり、ヨーロッパ中心の「PAL」(Phase Alternative Line) と呼ばれる方式とアメリカや日本などが中心の「NTSC」(National Television System Committee) 方式に分けられます。この呼び方はアナログ時代のもので、高画質化したデジタルHDでは1秒間に何枚の画像が伝送できてい

るのかによってPAL圏では「50i」、NTSC圏では「60i」と呼ばれる方式が主に使われています。

ボリビアを含む中南米地域ではNTSC方式でTVが開始され、現在は60iが採用されています。これは、日本と同じ方式であり、日本の地デジTVの伝送方式と同じものを採用しています。ボリビアと日本はTV方式について親和性があるため、日本のコンテンツをボリビアに、ボリビアのコンテンツを日本にといった交流が大変やり易いと思われます。

ボリビアの選手が参加する陸上競技(100m走や競歩)や競泳の中継も担当しましたので、ボリビアの方々にオリンピックの映像を届けられたかと思います。ボリビアと日本は互いに地球の反対側であるため、直接電波を届けるのが難しい超遠距離なのですが、現在では通信衛星などを使って電波を届けることが可能です。例えばアメリカのインテルサットという会社のIS20号機という衛星は、ヨーロッパ、アメリカ東部、南米地域などをカバーできる衛星でありながら、日本にも電波が届くという地球の半分をカバーする高性能な衛星です。こういった衛星を使えばボリビアから日本、または日本からボリビアに衛星経由で電波を届けることが可能になります。

現在、ボリビアのオキナワやサンファンの移住地などでは、NHKの国際放送が視聴されていると聞き及びます。これらの両移住地のほか、サンタクルス、ラパス、コチャバンバ等の3大都市の他、

日本の3倍という広い国土を持つボリビア各地に居住しておられる約1万4千人の日系人・日本人の皆さんと、約1200万人のボリビア人の方々が、オリンピック以後もこれまで以上に日本発の映像中継放送を共に楽しんで頂けるように、当社も微力を尽くしたいと思っております。

当社とボリビアを繋ぐ架け橋と致しましてはボリビアのテレビ放送を日本で視聴できる様にお手伝いさせて頂く事は可能かと思えます。今後、在日本ボリビア人に取り貴重な情報元及び娯楽になると思えます。ボリビアと日本とが相互に衛星放送中継を通じて映像をやり取りすることが実現し、両国間の友好親善が更に深まることを期待しております。

4. ボリビアとの縁について

最後に当社とボリビアとの縁について述べたいと思えます。私の母方の祖父の秋山玉吉は、南洋経済懇談会常務理事として、現在の一般社団法人日本ボリビア協会の前身である旧「日本ボリビア協会」の1954年(昭和29年)の設立総会で、理事の一人として名を連ねていることはコントゥータ44号でも述べた通りです。このような70年近い前に遡る昔のご縁に導かれて、今、協会の維持法人会員として、また「ボリビアと日本を繋ぐ企業」としてここに寄稿させていただきましたのも、祖父が導くご縁かと思っております。(終わり)

当社のホームページは以下の通りです。
<https://www.aruji.com/>

2. 初のアフリカ大陸・・タンザニア滞在記 (その1)

一般社団法人日本ボリビア協会
理事 上崎 雅也

1. はじめに

私は2015年3月に38年間勤めていた会社を退職した。もともと、大学でスペイン語を専攻していたこともあり、会社生活では出張、駐在とも殆どが中南米地域であった。そんな私が2018年5月11日(金)にJICA専門家として、アフリカ東岸の国であるタンザニア連合共和国(以下「タンザニア」とする)に赴くことになるとは、夢にも思っていなかった。

退職後の私は、大学院に通い、1994年にボリビア政府が実施した「教育改革」とその後、2006年に誕生した左派民族主義のエボ・モラレス政権が2010年に制定した「新教育法」の比較研究で修士号を取得したが、その後の私の第二の人生の場は中南米でも教育関係でもなく、アフリカのタンザニア産業貿易省における産業政策アドバイザーとしての職務であった。こうして私は、同国最大の都市ダルエスサラームの地を踏むこととなった。

産業政策アドバイザーという仕事は、安倍第一次政権時に外交成果としてアフリカ10か国においてODAの枠組みでスタートしたもので、JICAから現地政府機関に派遣されるアドバイザーには産業育成、経済効率化に協力することが期待されていた。タンザニアの場合、受入先の組織は、産業貿易投資省(MITI-Ministry of Industry & Investment)で、JICA事務所他でのひと月のオリエンテーションを経て、

この組織の事務官たちとの協働が始まった。着任時は、行政府が居を構える同国最大の都市ダルエスサラームが仕事場になる筈であったが、6月になって、突然大統領令ですべての行政府官庁と官僚は、この大都会から500km内陸に位置する憲法上の首都ドドマ（1973年に首都に制定されたものの立法府だけを抱えていた人口40万人ほどの田舎町）に移動せよとの指示が出されることになった。ボリビアで例えば、行政府も立法府もラパスから司法院しか置かれていない憲法上の首都スクレに移動せよと指示されるに等しい。

2. タンザニアとはどんな国か

まず、タンザニアとはどんな国か？ボリビアと比較しながらご紹介したい。



図2-1 タンザニア地図（出所：外務省HP）

国土面積は、94.5万km²（日本の約2.5倍）とボリビアの110万km²（日本の3倍）を少し下回る。ケニアとの国境にあるアフリカ最高峰のキリマンジャロ（5,895m）が有名であるが、独立峰であり、国土の主要部分は標高1,000m程度の平原を形成する。この点でアンデス山脈が国土を分断するボリビアとは、様相を異にする。

両国の人口を世銀統計で比較してみるとタンザニア（2022年）は6,385万人で、増加率が3.0%と世界トップクラスに高い。ボリビア（2021年）は、人口1,200万人で増加率は1.2%と落ち着きを見せている。アフリカは、現在、経済学でいう「人口ボーナス期」が到来しており、多くの国が人口増加率3%前後で国民の平均年齢も17歳から21歳と若い。労働力が有り余っていると見えるし、どんどん雇用を創造しないとアフリカ大陸全体が経済発展のプロセスを構築できない状況になりかねない。日本の国民の平均年齢は、49歳（2022年）と世界トップクラスにあり、経済は成熟期にあり、文化、芸術の花も咲く時代となった。アフリカ大陸との対比は、著しい。

タンザニアは、北の隣国ケニアと並んでサファリ観光で知られていて、国境近くに世界遺産のセレンゲティ国立公園、ンゴロンゴロ自然保護区、キリマンジャロ国立公園がある。これらの観光地には欧米から多くの観光客が押し寄せるので結構、外国人向けホテルが高い。ダルエスサラームでも平気で一泊200–400ドル。観光地では、500–1,000ドルは、かかる。ボリビアとタンザニアの比較に戻る。両国の共通点は、どちらも多民族国であるということだろう。ボリビアでは、アイマラ語、ケチュア語など36の先住民語が存在し、教育言語かつ共通言語としてのスペイン語を加えて37言語になる。そしてスペイン語は、支配者言語としての性格も併せ持つ。

一方タンザニアには120から140の民族が存在する。従って、先住民言語数もそれだけ数が多いが、現実を見ると、歴史的に交易上の共通語として使われていたダルエスサラームの沖合に位置するザンジバル島（ロックバンド「クイーン」のフレディ・マーキュリーの出身地）のスワヒリ語方言が標準語として広く使われてきた。タンザニア独立当時の1961年、初代大統領ニエレレは、この利点を利用し、ザンジバル・スワヒリ方言を英語とともに公用語として採用した。スワヒリ語は東アフリカ一般に広く分布しているバンツー語系の言語で、特定の方言を重用しても必ずしも支配者言語という訳ではないので、南米におけるスペイン語vs先住民言語のような支配・被支配の関係には、ならない。

更にニエレレは、民族間の対立を最小限に抑える為に人口の意図的なシャッフルを国民に課した。例えば北部の町で生まれた子供たちは、小学校を終えると、他の地域の中学校に進学し、高校進学時に更に別の地域の学校に進む。日本で例えると、鹿児島県で育った小学生が、宮城県の中学校に進み、その後、広島県の高校に進学すると言った具合だ。この政策によって、子供たちは、好むと好まざるとに係わらず公用語（教育言語）であるザンジバル方言のスワヒリ語で話さざるを得ない状況に置かれる。子供によっては出生地の先住民語を忘れてしまう状況が発生する。この為、時間の経過とともに公用語が普及し、更に人口移動に伴

い、異民族間の婚姻による混血が進み自然に「民族意識」も薄れていったというのが現実のようだ。

隣国ケニアでは、このような民族融合政策は、採用されなかった為か、民族対立が常に存在し歴史的に虐殺の事例も散見される。ニエレレの先見の明の確かさを感じる。

3. いきなりドドマに移動

しかし、何でこんなに急にドドマに移動しなければならないのか？ドドマが政治上の首都と定められたのが1973年。その理由は、先述の民族融和策に順じた理由であり、ダルエスサラームは、あまりに国土の東側に偏りすぎていて、国内各地からのアクセス面で公平を欠く為、国土の均衡ある発展への障害となる、というニエレレの思いにある。要は、多民族国家ゆえに各民族の不平不満を招かない為にもダルエスサラームではだめだということだ。ただ、現実的問題としてドドマ周辺のインフラの整備が追い付かず、なかなか実行に移せなかったとか。ところが2015年に就任したマグフリ大統領は、敬愛するニエレレ初代大統領の思いをいつまで経っても実現しようとせず、中央官庁がグズグズとダルエスサラームに留まっている現状を目の当たりにして大臣、次官だけでなく公務員は、皆ドドマに移駐させると決断。私が着任した翌月、6月6日に全員6月中に移動完了しろとの厳命が下り、大騒ぎになったということだ。特に、女性の公務員の場合、「旦那の勤

務地は、ダルエスサラーム。子供がまだ小さいのでベビーシッターをどうするのか？」あるいは、「ドドマの学校がもう移住者の子弟で一杯。家族を帯同するかどうか悩む！」といった問題が現実化した。

4. タンザニアの国民性

国民は、結構大人しく真面目だ。タンガニーカが英国から独立した1960年からザンジバルとの合邦を経て1985年まで統治した初代大統領ニエレレの社会主義政策の結果なのか、欧米のような個人主義や競争主義を感じない。目立つ事を嫌うようでもある。聞けば、田舎は完全なムラ社会で人に金を貸してくれと言われたら、「返ってこない覚悟で、貸すしかない」らしい。断ると、仲間に入れてもらえない。逆に仲間に入れてもらえると困っているときに助けてくれるらしい。

まあ、そんな国民性と各国からの厚い支援もあってか、一人当たりの所得(GNI)が着任当時の2018年では、1,000ドル弱と貧しい割に所得分配がきちんとした経済成長を遂げている。右の市内中心部の写真をご覧頂きたい。経済はインド系移民が握っており、以前建設されたビルは、主にインド系資本が建設しており、新しいものは、進出著しい中国資本が建設しているようだ。

東アフリカ沿岸部は、社会的文化的には「(環) インド洋文化圏」と呼ばれ、イスラムやインドが混在している。ホテル付近の路上の市場でも、インドや東南ア

ジアを思わせる雰囲気が漂う。



写真2-1 ダルエスサラーム市ビジネス街（旧市街）



写真2-2 ダルエスサラーム市旧市街インド系住民の多い商店街

5. タンザニアの食事

食事は、インド、イスラムの影響で、ケバブ、チャパティ、ナン、マサラ(カレー)ビリヤニ(インド式炊き込みご飯)等はどこでも食べられる。下の写真は、ビリヤニ「とても一人では食べきれない。」と言いつつ完食したが、香辛料が多いので消化には乳酸菌の助けが必要になる。写真2-3の右上の白い器はレッドオニオンを細かく刻み入れたヨーグルトでビリヤニと混ぜて食べるのが習慣となってい



写真2-3 ホテルのレストランで出てきたインド式炊き込みご飯（ビリヤニ）

る。写真2-4は、ダルエスサラーム市内のJICAタンザニア事務所の近所にあるCity Restaurantという名と実体がそぐわない、日本でいうと昭和30-40年代を思わせる懐かしい屋台風の飯屋だ。この手のレストランは、街の至る所に在り、タンザニアのソウルフードとも言えるムシカキと呼ばれる炭火焼BBQやウガリを食べさせてくれる。



写真2-4 ダルエスサラーム市内のカジュアルな屋台風飯屋“City Restaurant”



写真2-5 串に刺した牛肉のムシカキ、白米、豆の煮込み、トマトと玉ねぎを煮込んだソースのセット

写真2-4の右手の網焼き器で肉や鶏のムシカキを調理し、これに白米、フライドポテト、ピラウ(中東風炊き込みご飯。ピラフの語源だそうな)、ウガリ等を添えて写真2-5や次ページの写真2-6のような姿で食べさせてくれる。

これが実に美味しい。JICAの日本人女性職員は、青年海外協力隊員としてアフリカに勤務した人が多く、皆、手を使って器用に食べている。たくましい。鶏、牛

肉とも塩加減と遠赤外線の風味が絶妙でランチタイムでも確実にビールが欲しくなる！

アフリカ大陸の白米は、長粒米が主体ながら、日本米に負けないぐらいの粘り気がある。タンザニア人は日本人と同様に炊きあがった時に蓋を開けたら特有の香りが立ち、粘り気を感じる米を好む。だから日本人がタンザニアの白米を食べても全く違和感がない。当地の米は、アフリカ原産種と、アジア米とアフリカ米を掛け合わせたもの等結構種類があるらしいがいずれも日本米と同様タンパク質が多く粘りがある。そのおかげだろうか、在勤中、日本の米を食べたいとは、殆ど感じずに過ごすことが出来た。



写真2-6 焼き魚、ウガリ、豆の煮込み、ソースと野菜炒めのセット

この炭火焼(ムシカキ)や米とともにタンザニアを代表する主食がウガリだ。写真2-6の中心に見える「白っぽい塊」がそれで、トウモロコシやキャッサバの粉を水で練ったもので、多くのアフリカ諸国で食べられているが、タンザニアでも「母の味」らしい。高カロリー食なので私は、食べるというも胸やけに苦しむほどであった。写真ではウガリのそばにトマトと玉ねぎを煮込んだソース、野菜

炒めや焼き魚が添えてある。

時には、魚の代わりにムシカキがここに並ぶ。トウモロコシやキャッサバと聞くと「中南米原産じゃないか、なぜ？」といった声が聞こえてきそうだが、ア



写真2-7 ダルエスサラーム市内のイスラム街近くでは夕方5時過ぎからBBQの美味しそうな香りが漂う（ビールへの誘い）

フリカ大陸の多くの国では南米原産のとうもろこしもキャッサバも広く食べられている。これは、世に言う「三角貿易」の産物である。17世紀から19世紀まで続いた1,000万人を超えると言われる米州大陸への奴隷輸出を含む「三角貿易」が実はアフリカ大陸の食料事情をも大きく変化させた事実はお伝えしておきたい。多くの街では夜になると次の写真のように、路上でムシカキやチキンのBBQ（スパイスが効いたソースを絡めてあり実に美味しい！）の香りが漂い始めて、無性にビールを飲みたくなる。しかしながら、残念なことに、多くの店がムスリムの経営なので酒を置いていない。飲みたければ自宅にテイクアウトするしかない。

次回は2018年6月以降ドドマに本格的に居住してからの苦労談が中心になるが、都度ボリビアや中南米の問題と比較しながら話を進めていくことにしたい。

(つづく)

3. ボリビア開拓記外伝

—コロニアオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々—

日本ボリビア協会相談役

渡邊 英樹

だいいちぶ

おきなわけんけいじん れきし

第一部 ボリビア沖縄県系人の歴史

せんご いじゅうしゃ

戦後の移住者

せんご いじゅうかいし

戦後の移住開始

べいこくせいふ すみつ りゅうきゅう
米政府のお墨付きによって、琉球

せいふ いなみねいちろう りゅうきゅうかいがいきょうかいちよう
政府は稲嶺一郎 琉球 海外協会長と

せながひろし りゅうきゅうせいふけいざいきよきかくしつちよう
瀬長浩 琉球 政府経済局 企画室長を

いみんたんとくし はけん
移民担当特使としてボリビアに派遣した。

せいふ いみんきよか え
そして、ボリビア政府から移民許可を得

ふたり とくし ねん がつ りゅうきゅう
た2人の特使が1954年3月、琉球

せいふしゆせき あ かぞく めい どくしんしゃ
政府主席宛てに「80家族と80名の独身者

めい がつ
による400名を、8月までにサントス

こうけいゆ し どうちゃく こう
港経由サンタクルス市に到着するよう講

だでん
じられたい」と打電したことにより、

せんご けいかくいじゅう かいし
戦後のボリビア計画移住が開始された。

どくしんしゃ にん がわ
独身者80人というのは、ボリビア側

たんとう のうむだいじん べいこく たたか ゆうき
の担当の農務大臣が「米国と戦った勇気

にほんじん ち こくみん なか ひ
ある日本人の血をボリビア国民の中に引

つ きぼう つた
き継ぎたい」と希望したことによると伝

わっている。

とくし だでん う りゅうきゅうせいふ
特使からの打電を受けた琉球政府は

さつそく なんべい のうぎょう いみん ぼしゅう
早速「南米ボリビア農業移民募集

ようこう せいてい かくし ちょうそん はいふ
要綱」を制定し、各市町村に配布して

ぼしゅう かいし ようこうはいふ
募集が開始された。すると要綱配布から
わづか かげつ た おきなわぜんとう
わずか1カ月足らずで沖縄全島から4
せんになちか きぼうしゃ おうぼ さつとう かく
千人近くの希望者が応募に殺到した。各
しちょうせん だい じせんこう しゅうかん およ
市町村での第1次選考、1週間に及ぶ
かいがい いみん そうしゅつ けいかく しんぎかい げんせい
海外移民送出計画審議会での厳正な
せんこう へ がつ か てきかくしゃ にん
選考を経て、5月3日に適格者400人
(うち独身者80人)が新聞紙上で
はっぴょう
発表された。

いみん せんぱつ
ボリビアに移民として選抜された
てきかくしゃ にん はっぴょう じっさい
適格者は400人と発表されたが、実際
とこう にん どうかんしゃ
に渡航したのは405人だった。独身者
こんいん はんりょ つ しゅっさん
が婚姻して伴侶を連れていったり出産に
ぞうか おも
よる増加だと思われる。

せんご けいかくいじゅう
こうして戦後のボリビア計画移住は、
りゅうきゅうせいふ せんこう にん だい じん
琉球政府が選考した405人が第1陣
にん だい じん にん わ
の278人と第2陣の127人に分かれ
なほこう せん じょうせん
て那覇港からオランダ船に乗船して
しゅっこう はじ
出航したことから始まった。
ほんこん
香港、シンガポール、ケープタウンを
へ たいせいよう おうだん こう げせん
経て大西洋を横断してサントス港で下船
かいつうちょうご てつどう の
した。そこから開通直後の鉄道に乗って、
とちゅう いじゅうしゃみずか もくたんじょうききかんしゃ
途中では移住者自らが木炭蒸気機関車
ねんりょう まき あつ せんろわき じすい
の燃料となる薪を集め、線路脇で自炊し
かかん ながたび すえ
ながら7日間という長旅の末に、パイロ
えき とうちやく
ン駅に到着した。

けいこうにもつ ぎゅうしゃ の
たくさんの携行荷物を牛車に載せ、32

しんりんちたい すず ねん がつ
木の森林地帯を進んで1954年8月15
にち こうち とうちやく がつ
日にうるま耕地に到着した。さらに9月
にち みやこじましゅっしんしゃ おお の だい
14日には宮古島出身者を多く乗せた第
じん とうちやく しゅくしゃけんせつ ひ ぼっさいひ
2陣も到着した。宿舎建設費、伐採費、
ゆそうひ とうめん しょくりょう こうにゅう
輸送費、当面の食糧やトラック購入な
かん ひょう べいこくせいふ しきん
どに関する費用は米国政府からの資金
えんじょ しはら
援助で支払われた。

うるま病

にゅうしょく ねん
入植したはいいものの、1954年
だいかん とし にゅうしょくご
は大干ばつの年であった。入植後3
かげつ こうらう いんりょうすい りょう
カ月ほど降雨がなく、飲料水に利用して
ぬま こかつ ほ い ど しおみず
いた沼も枯渇し、掘った井戸は塩水のた
つか にご みず の
め使えず、リオグランデの濁った水を飲
じたい やさい そだ
む事態となった。野菜も育たないため
えいよう いっき あっか えいようしつちょう
栄養バランスは一気に悪化し、栄養失調
じょうたい がつ にち
状態になった。そして10月30日、ついに
さいしよ ぎせいしゃ で
最初の犠牲者が出た。

つぎつぎ ひとかぞく り
それからは次々と一家族に1~2人の
りびょうしゃ で おそ
罹病者が出るという恐ろしいことになり、
にゅうしょくち ふあん こんらん るつぼ か
入植地は不安と混乱の坩堝と化した。
とうしょ きんきゅう たいさく いんちょう にしひらしゅぞう し
当初、緊急対策委員長の西平守蔵氏
だい じ いみん だんだんちょう にゅうしょくいらい
(第1次移民団団長)は「入植以来
あめすく かん つづ いがい
雨少なく干ばつが続き、ユーカ以外の
さくもつ しゅうかく み こ あくせい
作物の収穫は見込みなし。悪性マラリア
はっせい めい うち めい ぎせいしゃ だ
発生。85名の内4名の犠牲者を出す」と
せいふ りゅうきゅうせいふ だでん
ボリビア政府と琉球政府に打電してい

る。（「ユーカ」とはタピオカの原料にもなるキャッサバのことで、南米では、ユカ、マンジョカとも呼ばれる）

1955年2月3日ボリビア政府派遣の医師団3人が到着した。病因の究明と治療に当たったが、死者が続出し、犠牲者は10人となった。このため100人近い移住者はサンタクルス市に避難した。2月12日、病魔におののくうるま耕地に、今度は無情にも水害が襲う。

うるま耕地はリオグランデ河の氾濫で周囲は水没して陸の孤島と化してしまった。一帯の水没によって低地に生息していた野ネズミが比較的小高い地形にあるうるま耕地に押し寄せ、移民宿舎に入り込み、恐ろしい勢いで食料や衣服を食い荒らした。そのことにより移住者の恐怖と悲哀は頂点に達した。

移住者405人のうち148人までもが罹病し、高熱と腹痛で倒れた。体力を失った15人の重症者は呼吸困難となり、爪や唇が紫に変色してその後亡くなった。国連、米国陸軍省派遣の医師等が投入されて移住者の病気の特定を進めたが、真の原因は突き止められなかった。このため「うるま病」と名付け

られた。戦争中に激戦を経験した移住者ですらこの状況を「戦場よりひどい」と語ったほどだ。

長崎県出身者が多いサンファン移住地について、抜け出すことのできない悪路と高い原生林の中に置かれて孤立状態にあることを理由に「緑の監獄」と称した人がいた。これに対して、雨の降らない焼け跡のよううるま耕地は「褐色の地獄」と言えた。

私はかつて、この時の様子をオキナワ日本ボリビア協会の初代会長である当真徳善さんの夫人・芳子さんに聞いたことがある。「次々と犠牲者が出たような夜は三線でも弾いて弔いながら過ごしたのですか」という私のぶしつけな質問に「そんなどころではなかった。明日は我が身と思っていたので、皆、暗闇の中で息を殺すように過ごした。なので物音一つせず、シーンと静まりかえっていた」と恐怖に押しつぶされそうな様子を語ってくれた。

また「男たちは入植地設定やいい加減な適地調査に対する責任追及、さらには今後の対策を巡っての議論になる度には今後の対策を巡っての議論になる度には意見がまとまらず、酒を飲んでではけん

かばかりしていた」と話し、当時の
 焦燥感にさいなまれる様子を明かしてく
 れた。

さらに、あの頑健な元陸軍中尉の友利
 金三郎さんさえもが罹病して危篤状態に
 なったと聞いて驚いた。同じ宮古島
 出身というよしみもあり、今夜がヤマ場
 という時、芳子さんは友利さんの義弟で
 元陸軍衛生兵の土地貞徳さんに抗生物質
 の注射があることを告げた。

当真夫妻が日本を発つ時、親類の医師
 が餞別代わりに渡してくれたものだった。
 土地さんはこの注射を友利さんに「イチ
 かバチか」という思いで打ったという。
 それが効いたかどうかは不明だが、友利
 さんは一命を取り留めた。

「恐ろしくて見ていられない。一刻も
 早く移転しなさい」という医師の勧告に
 よって移転先の調査が行われパロメティ
 ーヤへの移動をするために、先発隊が
 派遣された。

4月16日、移住者待望の琉球政府
 使節、山川泰邦社会部長、照屋善助コザ
 保健所長、米国よりリーディング中佐、
 ウェットキン氏の一行がサンタクルス市
 に到着。新垣庸英さんの自宅で緊急

対策委員会を開催し、翌17日パロメティ
 ーヤに調査に赴き、再び庸英さんの
 自宅で懇談会を開き、うるま耕地からの
 全員移動の方針を決定する。

庸英さんは、はっきりとは私に言わな
 かったが、話の端々から、この時、戦前
 の移住者の中に、初志を貫こうとする
 意見とうるま耕地の移住者の救出を
 最優先とする意見との二つに分かれたと
 感じた。

緊急対策委員会が庸英さんの自宅で2
 回も開かれたことから、たとえこれまで
 の仲間と袂を分かっても庸英さんが戦後
 の移住者の救出を最優先にして各方面
 に懸命に働きかけたに違いないと確信し
 た。

「沖縄村建設構想」を主導してきた、
 具志寛長、赤嶺亀の両委員は、過去4カ
 年、戦前の移住者が一丸となって努力し
 てきた結果が、大自然の猛威の前で水泡
 に帰し、自分たちの意図したことが根底
 から覆されてしまい無念の思いを抱い
 て去っていった。

移動に強硬に反対していたボリビア
 政府農牧省も、山川・照屋両特使の
 強力な交渉により移動を許可した。

べいこく さいえんじょしきん やく まん せん
 米国は再援助資金として約11万5千ドルを
 しきゅう
 支給した。これによってパロメティーヤ

ぜんいんいどう おこな
 への全員移動が行われた。

こんらん じょうきょうか
 そんな混乱の状況下にあるパロメティ
 おきなわほんとう だい じ いみん
 ーヤに、沖縄本島にいた第1・2次移民
 ざんりゅうかぞく ふく にん だい じ
 の残留家族を含めた122人の第3次
 いじゅうしゃ どうちやく
 移住者が到着している。



写真3-1 うるま耕地に入植した人々（1954年）

バルバロ事件

きゅういじゅうしゃ よ おも しんいじゅうしゃ
 旧移住者は善かれと思って新移住者を

こうち にゅうしょく
 うるま耕地に入植させた。しかしその
 けっか どうほう し ち ひ い
 結果、同胞を「死の地」に引き入れるこ

じせき ねん か
 とになってしまい、自責の念に駆られる
 みづか えが おきなわむらけんせつ
 ことになり、自らが描いた「沖縄村建設

こうそう だんねん え
 構想」をも断念せざるを得なくなった。

いっぼう しんいじゅうしゃ きぼう いた き
 一方、新移住者は希望を抱いて来た
 けっか いじょう せいさん じょうきょう
 結果が、これ以上ない凄惨な状況にお

いじゅう けつい じしん ほんだん あま
 かれ、移住を決意した自身の判断の甘さ
 こうかい てきちょうさ はかせ
 への後悔と適地調査をしたテグナー博士

いじゅう しょうらい べいこく せいふ なら
 や移住を奨励した米国政府並びに

りゅうきゅうせいふ いか ふた かんじょう しょう
 琉球政府への怒りの二つ感情が生じ
 ひてい
 てしまったことは否定できない。

ぬ さ ふしんかん しょう
 さらに抜き差しならない不信感を生じ

じけん じけん
 させてしまった事件があった。その事件

いじゅうくみあい ちゅうしんじんぶつ
 とは「うるま移住組合」の中心人物であ

あかみねかめし おとうと こうち
 った赤嶺亀氏の弟さんが、うるま耕地

しゅうへん ちようさちゅう しゅりょう
 周辺を調査中、ジャングルで狩猟

さいしゅうせいかつ せんじゅうみん
 採集生活をしていた先住民バルバロに

むね さ ご しぼう
 ヤリで胸を刺され、その後、死亡した

じけん
 事件である。

こうくうそくりょう めやす さんかくひょうしき
 航空測量の目安となる三角標識を

かち おも も かせ
 価値あるものと思って持ち帰ろうとした

と かせ
 バルバロから、それを取り返そうとして

ついせき い さ
 追跡して行って、刺されたという。

きゅういじゅうしゃ りゅうきゅうせいふ
 しかし、旧移住者は琉球政府に、こ

じけん つた きゅういじゅうしゃ
 の事件のことを伝えなかった。旧移住者

じけん かく
 はなぜ事件を隠したのか。

おきなわむらけんせつこうそう かんけい
 これは「沖縄村建設構想」と関係があ

せんぜん いじゅうしゃ せんご どくしんいじゅうしゃ
 る。戦前の移住者は、戦後の独身移住者

ろうどうりよく あ
 の労働力を当てにして、すでに「うるま

のうぎょうくみあい めい こうち りんせつ
 農業組合」名でうるま耕地に隣接した

とち 2500 ぶん まん
 土地2500畝を6万ボリビアーノスで

こうにゅう じけん つた
 購入していたからである。事件を伝えれ

こうち
 ば、うるま耕地がバルバロのテリトリー

こうどうけんない わ
 （行動圏内）であることが分かってしま

にゅうしょくち ふあんし
 う。そうなれば、入植地として不安視さ

おきなわむらげんせつこうそう しょうめつ
れ、沖縄村建設構想そのものが消滅する
のではないかと恐れたのだ。

あにやあきら せいねん じぶん
安仁屋晶さんたち青年は、自分たちの
にゅうしょくち きげん ちいき し
入植地がそんな危険な地域にあるとは知
らされずに、漠然と警戒のためと説明さ
れて、地元警察から拳銃10丁と弾丸1
000発を渡されて、毎日見回りをして、
3時には決まって威嚇射撃をしていたと
いう。それは、「うるま病が、発生して、
それどころではなくなるまで続けられ
た」と語ってくれた。

せんご いじゅうしゃ じけん し
戦後の移住者たちが、その事件を知っ
たのは入植してしばらくして、ヤリの
ぎせいしゃ ちょうきりょうよう かいふく
犠牲者が長期療養するも回復できずに
なくなった後のことであった。この隠し
ごとによって、新移住者の心の中に旧
いじゅうしゃ たい ふしんかん しょう
移住者に対する不信感が生じてしまった
ことはやむを得ないことであった。この
「うるま耕地」から「パロメティーヤ」
への移転を契機として新旧の沖縄県人は
袂を分かつことになってしまった。

せんそう ぎせいしゃどうし どうきょう どうほう
戦争の犠牲者同士、それも同郷の同胞
どうし しんきゅういじゅうしゃ
同士であるにもかかわらず新旧移住者の
あいだ ふか みぞ かな
間にこんな深い溝ができるなどという哀
しい結末を誰が想像できたであろうか。

いってん さき あんじゅう ち
しかも、移転した先も、安住の地とは
ちけんしゃ とち しゅとく
なりえなかった。地権者との土地の取得

こうしょう ふちょう お
交渉が不調に終わってしまったのだ。
せいかん べいこくせいふ いらい う
静観してられない米国政府の依頼を受
けたパス・エステンソロ大統領の協力
によって現在のオキナワ移住地に、さら
なる転住をして、ようやく定着するこ
とができたのである。



写真3-2 パロメティーヤへの移動 (1955年)

なんと、それは、第1次移住者がポリ
ビアに到着してから2年余の流浪の生活
を強いられた後の1956年10月のこと
であった。計画された集団移住で定着
までに2年の歳月を要したなどという
悲惨な移住の歴史をほかに知らない。

いみなね いちろう りゅうきゅう かいがい きょう
ところで、稲嶺一郎 琉球 海外 協
かいちょう にゅうしょくち じょうたい み
会長は入植地の状態を見てポリビアか
ら の 帰 途 に 急 遽、 単 身 ワ シ ン ト ン に 飛 び、
べいこくせいふ まん おきなわいみんえんじょしきん
米国政府に82万ドルの沖縄移民援助資金を
ようせい よさんか
要請した。それが予算化されたのは、2
ど てんじゅう く かえ あと
度の転住を繰り返した後であったので、
しきん だい だい かん
資金は、第1コロニア・第2コロニア間

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

かんせんどうろ ぞうせい びょういんけんせつ つか
の幹線道路の造成と病院建設に使われる
ことになった。ふあん ひび す
不安な日々を過ごしてき
いじゅうしゃ どうろ ひら びょういん
た移住者たちは「道路が開かれ、病院が
た 建てられたことにより、ようやく ていちゃく
できそうだと感ずることができたとい
う。

しんきゅういじゅうしゃ きょうどう けいざい
しかし、新旧移住者が共同で経済
かつどう せんご いじゅうしゃ
活動することなく、戦後の移住者だけ
あらた そうせい と
で新たにコロニアオキナワの創世に取り
く けっか ご
組むことになった。その結果スペイン語
わ せい しゃかい
が分からない1世のコロニア社会と、
にほんご わ せい きゅういじゅうしゃ
日本語が分からない2、3世の旧移住者
かんけい しだい そえん
のコミュニティーとの関係は次第に疎遠
になってしまった。(つづく)

ちゅうき しゃしん ず
注記：これまでの写真および図は「コロニアオキナ
にゅうしょく しゅうねんきねんし いんよう
ワ入植50周年記念誌」から引用。
ほんしょ せい ひと よ
※本書は、日系2世の人たちが読みやすいように
ぜんかんじ
全漢字ルビをふっています。



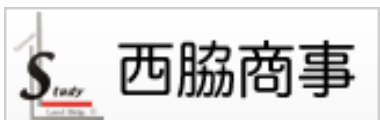
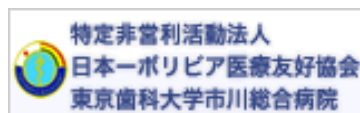
琉球新報社のご厚意で転
載させていただきます。
ご関心を持たれた方は下
記琉球新報社URLをご覧
ください。

<https://store.ryukyushimpo.jp>

編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2023

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)